

ジェイン・オースティンとフェミニズム

— 『マンズフィールド・パーク』を中心に—

Jane Austen and Feminism, Focusing on *Mansfield Park*

相澤 興 一

Abstract

This paper surveys the feminist approaches to Jane Austen's novels, especially focusing on *Mansfield Park*. It was generally believed that Jane Austen was a writer of conservative ideology with little relation to revolutionary feminism, though she was a contemporary of the famous feminist predecessor Mary Wollstonecraft. One of the reasons for this is because Jane Austen did not refer to her nor did she directly describe feminist ideology anywhere in her novels or her letters. Since the rise of the feminist literary criticism in the 1970s, feminist approaches have come to be adopted in the literary criticisms of Jane Austen and her works. With this, her close ideological relationship with Wollstonecraft has also become a focus of attention. This article will survey how Jane Austen has been analyzed in relation to feminism and from the feminist point of view.

はじめに

18世紀の英国は家父長制社会 (patriarchy) であった。父が絶対の権限を持ち、財産 (property, estates) は長男が相続し、男子不在の場合は父方直系の親戚の長男が限嗣相続 (entail) した。このような社会にあっては女性の地位は極端に低く、また女性のする仕事もほとんど無きに等しく、自立の道を閉ざされていた。女性は結婚相手を見つけ男性に依存して生きるしか生きる道はなかったのである。その生き方も自己犠牲と自己滅却 (self-effacement) に基づく、男性追従ないしは隷従が美德とされ、自己主張はタブー視された。このような社会にあって特に18世紀後半から女性の作家が登場し、作法書 (conduct books)、評論、小説などを書き始めた。しかし彼女たちも女性であるという理由で必ずしも社会に快く受け入れられたわけではない。社会に受け入れられるにはそれに迎合する思想やテーマを扱う作品を書くのが一つの道である。その一方で、このような社会に反旗を翻す女性も登場した。その代表格はメアリー・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft, 1759-97) である。彼女はその後のフェミニズム運動の先駆けとなった女性である。その思想の核心は「男性と女性とは神の前で平等である」ということである。女性が男性への隷従的状況から脱却して、自由と独立と「理性」をよりどころとする「理性的人間」 (rational creatures) の権利を獲得することである。⁽¹⁾

ジェイン・オースティン (1775-1817) はウルストンクラフトより16年遅れて誕生しているが、同時代のバーニー (Frances Burney, 1752-1840)、エッジワース (Maria Edgeworth, 1768-1849)、ラドクリッフ (Ann Radcliffe, 1764-1823)、などとは違って、彼女の作品や書簡の中でウルストンクラフトは触れられることはなかった。(NA 38, 39)⁽²⁾

1960年代殊にアメリカを中心に盛んになったフェミニスト運動の影響を受けた文学批評が1970年代に台頭した。ジェイン・オースティンに関する本格的フェミニズム批評の口火を切った者の一人がマーガレット・カーカム (Margaret Kirkham) である。彼女は *Jane Austen, Feminism and Fiction* (1983) というオースティン論でその見解を開陳している。最近では、といっても20年近く前のことであるが クローディア・L・ジョンソン (Claudia L. Johnson) がその流れを汲む *Jane Austen: Women Politics and the Novel* (1988) を残している。

本論文ではジェイン・オースティンの作品中特に『マンスフィールド・パーク』を中心に特にこの二人のフェミニズム批評について論ずる。

1.

ジェイン・オースティンの6大作品中特にヒロインの家庭に限って考えた場合、父親が家庭を支配し、その権限の強さが家父長制社会を強く印象づける作品はさほど無い。父親の存在の影が薄い場合が多い。『自負と偏見』のベネット氏、『エマ』のウッドハウス氏などがその典型である。ベネット氏については、若さと美貌に騙されて愚かな妻と結婚したために、妻にたいする「尊敬、敬意、信頼」(respect, esteem and confidence) はもとより、「家庭的な幸せ」(domestic happiness)(P&P 236) も失われてしまったという。彼の楽しみについて

He was fond of the country and of books; and from these tastes had arisen his principal enjoyments. To his wife he was very little otherwise indebted, than as her ignorance and folly had contributed to his amusement. This is not the sort of happiness which a man would in general wish to owe to his wife; but where other powers of entertainment are wanting, the true philosopher will derive benefit from such as are given. (P&P 236)

と述べられ、妻にたいする恩義があるとすれば、それはただ「無知と愚かさ」を楽しむことであるとしている。妻や娘達からは距離を置き家庭的なことからは手を引いて読書などの孤独な生活に逃避している様が伺える。従って父親の権威をかざして家庭を支配下におくことはない。ウッドハウス氏についても、家庭教師のテーラー嬢に較べると知的にも年齢的にもはるかに劣り、彼女が結婚して Highbury を去るとエマは「知的孤独に苦しむという大いなる危険にさらされる」(she was in great danger of suffering from intellectual solitude)(E 7) というから父親としての権威は全くないといってよい。彼が何かに反対することがあるとしてもそれは父親としての権威に関わるからではなく、病弱な (valetudinarian) 体力に影響するからである。『ノーサンガー・アベイ』のヒロイン、キャサリンの父親も

Her father was a clergyman, without being neglected, or poor, and a very respectable man, though his name was Richard—and he had never been handsome. He had a considerable independence, besides two good livings—and he had never been addicted in locking up his daughters. (NA 13)

と語り手によって紹介され、父親の権威を振りかざす存在でないことは「娘達を監禁することにはふけることはさらさらなかった」(had never been addicted in locking up his daughters) という表現によってア

イロニカルに示されている。(この背景にはキャサリンが恋をし、結婚することになるヘンリー・ティルニーの父親でノーサンガー・アベイの主ティルニー將軍の正体にたいする暗示がある。ティルニー將軍はオースティンの作品に登場する最も暴君的な父親である。) エリザベス、エマ、キャサリン共に父親の意向に忖度することなく自由に行動する人物に描かれている。『説得』のヒロイン、アンの父親サー・ウォルター・エリオットは階級意識が強く、自分の出自と容貌にたいする誇りに生きている人物である。

Vanity was the beginning and the end of Sir Walter Elliot's character; vanity of person and of situation. He had been remarkably handsome in his youth; and, at fifty-four, was still a very fine man. Few women could think more of their personal appearance than he did; nor could the valet of any new made lord be more delighted with the place he held in society. He considered the blessing of beauty as inferior only to the blessing of a baronetcy; and the Sir Walter Elliot, who united these gifts, was the constant object of his warmest respect and devotion. (P 4)

自分の容貌と身分のことが精一杯で家族のことに無関心、また手元不如意にもかかわらず経済観念が無く、浪費癖のため負債を背負い込んで出費削減 (retrenchment) を迫られる状況に追い込まれている。Kellynch Hall で生活を続けられなくなり、Hall は貸し出され Bath に移り住まなくてはならなくなる。移転先の決定に当たってもアンは Kellynch Hall の近くを望むがエリオット氏は Bath にこだわる。その最大の目的は面目を保つためである。Kellynch Hall 近くに住めば、そこを貸し出さねばならなかったという現実を常に突きつけられるからである。アンはこのことを含め父親と姉エリザベスからことごとく意図や主張が認められない。

Anne, with an elegance of mind and sweetness of character, which must have placed her high with any people of real understanding, was nobody with either father or sister: her word had no weight; her convenience was always to give way; she was only Anne. (P 5)

そういった意味でアンは父親の権威に追従を強いられている。また母親代わりを務めるラッセル夫人は、3人娘の中でアンを最も信頼し愛しているが、階級意識が強くアンのウェントワース大佐との結婚に反対し、結婚を断念するよう「説得」する。この物語の発端である。

『説得』は階級社会、家父長制社会からのアンの離脱とその超克の物語ともいえる。その意味ではフェミニズム批評の格好の対象であろう。但し自分のことにかまけるサー・ウォルター・エリオットの父親としての存在感は希薄であり、アンの将来にたいする影響力はない。

『分別と多感』の場合はどうであろうか。物語は冒頭から Norland estate の遺産相続の話で始まり、老ダッシュウッドから遺産を相続したヘンリー・ダッシュウッド氏の死がダッシュウッド家の妻や娘達にもたらす不運について語られる。家屋敷は腹違いの息子ジョン・ダッシュウッドが相続し、その非情な妻の意向も手伝って、一家は Norland Park を去らねばならない羽目になる。そういった意味でヒロインのエリナーとマリアンは家父長制社会の影響をまろに受けることになる。その言動や運命において父親の影響を直接受けることはないが、兄ジョンとその妻および妻の親族の影響は以降も受

け続けることになる。但し、家父長制社会との対立あるいは対峙の構図が全体を支配することはないように思われる。

『マンズフィールド・パーク』は『ノーサンガー・アベイ』と共に家屋敷がその題名となっている。後者の場合どちらかと言えばもともと「アベイ（僧院）」であったところを改装して、ティルニー將軍が相続によらずに手に入れた新興の住居といえる。一方 Mansfield Park は相続により住みついた準男爵サー・トーマス・バートラムの君臨する邸宅である。

About thirty years ago, Miss Maria Ward of Huntington, with only seven thousand pounds, had the good luck to captivate Sir Thomas Bertram, of Mansfield Park, in the county of Northampton, and to be thereby raised to a baronet's lady, with all the comforts and consequences of an handsome house and large income.(MP 5)

彼と結婚するマライア・ワードの元の身分は明らかにされていないが、この結婚が玉の輿として周囲に羨ましがられているところを見れば準男爵以下の家柄の出身者であることは間違いない。姉は、後に死に別れるが、私財を持たぬ牧師ノリスと恋愛結婚することになる。幸いサー・トーマスの力添えで Mansfield の聖職録にありつき一年に1000ポンドほどの収入で幸せな結婚生活を送ったという。一方、妹のフランシスは「家名を汚し」(disoblige her family)、教育も、財産も、姻戚関係(コネ)もない海軍士官「海兵隊の中尉」(a Lieutenant of Marines)と結婚している。このことからワード家は紳士階級に属しているかもしれないが、サー・トーマスには身分・財産共にはるか及ばないことが分かる。サー・トーマスはバートラム家の家長として Mansfield Park を支配下においている。そこに養子として迎えられる貧乏な海軍士官の長女のヒロイン・ファニーが直面する様々な体験は階級社会・家父長制社会における女性一般の体験に通底すると思われる。フェミニズム批評の対象として最も格好な作品といえる。『マンズフィールド・パーク』を本論考の主な対象に選んだ理由でもある。

2.

デイヴィッド・モナガン(David Monaghan)は、1981年に出版した *Jane Austen in Social Context* の中で12人のオースティン学者の評論を掲載している。⁽³⁾ その中で本人が執筆した“Jane Austen and the Position of Women”⁽⁴⁾ とルロイ・W・スミス(Leroy W. Smith)“*Mansfield Park: The Revolt of the ‘Feminine’ Woman*”⁽⁵⁾ はフェミニズム批評の先駆的な作品として注目に値する。

モナガンは、家父長制社会ということばは使わないが、男性中心の社会、女性が男性に劣る者として冷遇される社会にたいして、オースティンが不満を示し、「例えば、ウルストンクラフト同様、女性が生来男性と同じように知的・理性的であるという仮説に基づき活動する」(Like Mary Wollstonecraft, for instance, Jane Austen operates on the assumption that women are inherently as intelligent and rational as men.)⁽⁶⁾ と述べ、エリザベスのダーシーとの対等な関係などを例に挙げその真実を裏付けている。モナガンは、このような女性の使命が「作法」(manners)を身につけ、保守的な「現状」(status qua)を維持することであると、オースティンが考えていたという⁽⁷⁾。保守的現状とは、社会が神の創造物であり、その中では全てが美しく秩序づけられ、そこに住む個人は全体の小宇宙(a microcosm of the whole)となるような状態である。全ての個人の行動が全体的な有機体の健康に関わる。従って個人の道徳的実践にたいする関心が高まり、その道徳的実践が作法という形を取る。正し

い作法が重要になってくる所以である。これを支えるのが知的な女性の役目であるとオースティンが考えていると述べている。フェミニスト的知性や気性は保守的社会の維持存続に捧げられるというのである。モナガンは、この論文の最後で、最も改革的・進歩的なフェミニストを『説得』の海軍提督夫人クロフト夫人に見ている。その後継者としてアンが想定されているといってもよい。

ルロイ・W・スミスは前掲の論文で、まず『マンスフィールド・パーク』の世界は家父長制社会(patriarchy)であることを明示している。彼女は、女性であるために隷属的、受け身的で「自我の潜在性を窒息させる」(stifle the potential for selfhood)⁽⁸⁾ 状況の中でファニーがどう生きるか、が作品の主題であると考えている。

The plot of *Mansfield Park* turns on two events: an abortive revolt against the restraints of patriarchy by its favoured offspring and a successful revolt against its constraints by Fanny Price. In the first revolt the 'corrupted' children of patriarchy seek independence in order to indulge their whims, but their rebellion tends toward moral chaos. In the second revolt, however, Fanny Price, seeking to preserve her moral integrity and selfhood from the depersonalizing demands of the patriarchal order, rehabilitates the moral order.⁽⁹⁾

この作品には家父長制社会にたいする二つの反逆があり、その一つはバートラム家の子どもたちのもの、もう一つはファニーのものである。前者は気まぐれに基づき道徳的な混沌を引き起こし破綻する。後者は家父長制社会の秩序の人格を無視する要求から道徳的な誠実と自我を護るためのものである、と主張している。ヘンリー・クロフォードとの結婚を巡って、ファニーはサー・バートラムの激しい攻撃、さらには好意を寄せるエドマンドの説得にさらされるが、自分の意志を最後まで貫く。オースティンがこの作品を書いた意図について、

One question remains: what was Jane Austen's purpose in writing *Mansfield Park*? At the heart of the matter Jane Austen is concerned about the threat to selfhood of a social order that subordinates the needs of the individual to those of the society; specifically, in *Mansfield Park* she depicts what for her would be the most pressing and disturbing form of this danger—the victimisation of the female in a male-dominated society.⁽¹⁰⁾

と述べ、この作品におけるオースティンの主張は保守的ではなく、改革的・進歩的で「フェミニスト的要素」('feminist' element)⁽¹¹⁾ があるという見解を支持できると指摘している。ルロイ・W・スミスはこの論文も含め、1983年に *Jane Austen and the Drama of Woman* を上梓している。⁽¹²⁾ 次に言及するマーガレット・カーカムの主張に著しく近づいている。

マーガレット・カーカム (Margaret Kirkham) は、1983年に *Jane Austen, Feminism and Fiction* を出版している。この中でジェイン・オースティンをメアリー・ウルストンクラフトと同様にフェミニスト的モラリスト (feminist moralist)⁽¹³⁾ あるいは啓蒙主義的フェミニズム (enlightenment feminism)⁽¹⁴⁾ の代弁者と位置づけている。両者は共に家父長制社会における男性優位の思想と女性の弱さや劣等性についての先入観に抵抗し、女性の知性と理性と独立心を証明すると共に女性の権利の拡張を求めていると主張する。ウルストンクラフトはその激しい主張と、反社会的な行動のために反発を招き、彼女に同調するものは白い目で見られたという。特にその夫ゴドウィンの著した不倫、自殺未遂、

婚前懐妊などについての赤裸々な伝記のために彼女の評価は地に落ちたといわれる。オースティンが彼女に言及せず、彼女と同じ思想を持っていたことが認められていないのはフェミニズムにたいする当時の受け止められ方のせいであるとカーカムは推論している。つまり、フェミニストであること自体が不名誉なことであったのである。兄ヘンリーが書いたオースティンの *Biographical Notice* (1817) において、彼女の家庭性 (domesticity)、満足感 (contentment)、敬虔さ (piety) が、また甥のオースティン・リー (James Edward Austen-Leigh) が著した *Memoir* (1870) においても「献身的な叔母の家庭的な満足」(the domestic contentment of devoted aunt)⁽¹⁵⁾ が強調され、いわゆる「優しいオースティン」(gentle Austen) を印象づけているのもオースティンが知的で独立心の旺盛なフェミニストであったことを隠すためであったのだと述べている。ヘンリーの描くオースティン像について、カーカムは

And, if Jane Austen were at all like the woman described by Henry, she could hardly have written works which, through their irony, make serious criticisms of gross error in contemporary life and literature.⁽¹⁶⁾

と述べ、作品から想像されるオースティン像との隔たりが余りにも大きいと考えている。一方オースティン・リーの *Memoir* についても、叔母の生存中にほとんど面識もなく間接的資料に基づいて書かれた故に信憑性に欠けるとしている。

カーカムは、『マンスフィールド・パーク』にはライオネル・トリリングがオースティンの本領とする現実把握の方法としてのアイロニーが欠けている点を指摘しているが、それはオースティンのフェミニスト的視点にたいする認識不足による誤解だと指摘する。彼女は作品の構造、プロット、人物造形全般にわたり「アイロニカルな隠喩」(ironical allusion) に満ちていると述べ具体的な検証をしている。

まずはヒロイン・ファニーについてである。ファニーはルソーの作品『エミール』に登場する「エミールにとっての非のうちどころのない妻、ソフィーおよび当時の感傷的な類の作法書に描かれる模範的な若い女性」(Sophie, the perfect wife for Emile, and the exemplary young woman of the more sentimental kind of conduct book)⁽¹⁷⁾ に擬せられているという。その特徴は純真無垢さ (innocence)、信心深さ (religiosity)、従順さ (submissiveness)、弱さ (vulnerability)、臆病さ (timidity) であり、また聖女らしさ (saintliness)、天使らしさ (angelic) などである。これらの性質は男性の保護意欲、性的情熱、妻として迎える願望を掻き立てる。ヘンリー・クローフォードのファニー執着の動機もここにある。ファニーのこれらの性質中、無垢さ、弱さ、臆病さ、従順さなどは貧乏家族の生まれ、養子としての肩身の狭さ、それに付け加えてノリス夫人を中心とするいじめなど環境と境遇のもたらしたごく自然なものであるが、そこに「無思慮な従順さ」(unthinking docility) を見るのはヘンリー・クローフォードの色目である。ファニーには結婚の対象となる者との間に対等ないし友人関係を確立する知力があることをヘンリーは見抜けない。カーカムはオースティンが『マンスフィールド・パーク』にファニーを登場させることによって、ルソーや作法書の描く理想の女性像にウルストンクラフトと共に異を唱え、その対極に男性と対等な知的で独立した理想の女性像を対置させているのだというのである。ヘンリーとの結婚を強引に勧めるにもかかわらず、頑として受け付けないファニーにたいするサー・トーマスが発する次の発言、

I had thought you peculiarly free from willfulness of temper, self-conceit, and every tendency to that independence of spirit, which prevails so much in modern days, even in young women, and which in young women is offensive and disgusting beyond all common offence. But you have now shewn me that you can be willful and perverse, that you can and will decide for yourself, without any consideration or deference for those who have surely some right to guide you—without even asking their advice. (M 318)

をそのままファニーの実像と捉え、彼女の姿に家父長制社会における典型的な父親像サー・トーマスの命令ないしは意向に背くフェミニストを見ている。この捉え方は前述のルロイ・W・スミスと全く同じである。そしてルソーや作法書の描く保守的な女性像のなれの果てをバートラム夫人に見る。彼女は考えること、判断することをサー・トーマスに任せ、子どもの教育も放棄して惰眠をむさぼる愚鈍な母親である。ここにオースティンの痛烈なアイロニーがあるとカーカムは考えている。

3.

クローディア・L・ジョンソンはフェミニズム批評の視点を採り入れて『マンズフィールド・パーク』の複雑な構造を解明しようとする。

Austen's enterprise in *Mansfield Park* is to turn conservative myth sour as she surely need not have done were her allegiance to the world of the country house as assured as is generally argued. ⁽¹⁸⁾

ここにいう「保守的神話」(conservative myth)とは家父長制社会にまつわる観念・思想・仕来りに他ならない。ジョンソンによれば、サー・トーマスは「娘達が、バートラムの名を留める限り、その名に新たな品格を付与してくれるにちがいないと感じ、そこを去るに当たってはその名に恥じない親戚関係を広げてくれると信じる」(His daughters he felt, while they retained the name of Bertram, must be giving it new grace, and in quitting it he trusted would extend its respectable alliances) (M 20)「古典的な良家の父親の願望」⁽¹⁹⁾を持ち、威厳(dignity)をもって慈善や家運の維持に努める家長の役目を果たす一方で、「無神経さでその高潔さを汚す」(sully his probity with deadpan insouciance)⁽²⁰⁾と指摘している。その例として、ファニーを養子として一家に迎え入れる慈善の心もちながら、あくまでもファニーが常に「バートラム家の令嬢の一人」ではないことを自覚させることを条件としたり、救い出そうとする家族の命運・財政は西インド諸島の奴隷の労働にかかっていたりする点を挙げる。オースティンが保守的な社会の信奉者であると信じられて来たが、もしそうであれば考えられないほどこの作品では保守的社会、つまり家父長制社会を辛辣に扱っている⁽²¹⁾、そしてマービン・マドリックなどの主張とは違って⁽²²⁾、「アイロニーが最も乏しいどころか最もあふれる小説」(Austen's most rather than her least ironic novel)、「保守的フィクションの痛烈なパロディー」(a bitter parody of conservative fiction)⁽²³⁾だともいう。それは目立たない形で至るところに散りばめられた「アイロニックな描写」(ironic details)ばかりではなく、小説の中心的な最も顕著な主題や人物描写にも表れていると指摘している。例えば、保守主義の代表エドモンド・バーク的「崇高」(the sublime)の「代表」(figurehead)サー・トーマスは家長としての威力(sway)を誇示し、子どもたちを怖じ気づかせているが、父親としての権威は表面的なものにしか過ぎず、彼らの「無法状態」(lawlessness)を鎮めることができないさまがアイロニックに描かれる。またバークの

主張する女性の「可愛らしさと弱さ」(littleness and weakness) に根ざす「美しさ」(the beauty)、「女らしさ」(the feminine) についてもパートラム夫人を通してアイロニー、パロディーの対象となる。「美しいこと」(being beautiful) が、ウルストンクラフトのいう「うぬぼれ無分別な人形」(vain inconsiderate doll)⁽²⁴⁾ になることだという認識はオースティンにも通じるとしている。

保守主義の擁護者は、家父長制社会の家庭が道徳的感情を育て、忠実な子どもそして思いやりのある兄弟姉妹を育む同じ愛情が地域の従順な住民や責任感の強いメンバーを育成すると主張するが、『マンスフィールド・パーク』においては、トムに見られるように必ずしもそうではない。保守的神話の「見せかけ」(the pretenses) と「実態」(the substances) の乖離がこの作品を『ノーサンガー・アベイ』以上に、喜劇ではなくパロディーにしている。さらに「神話性の剥奪(ないしは脱神話化)」(demystification)⁽²⁵⁾ の物語とも述べている。人物が多かれ少なかれマンスフィールド・パークにおける家庭や社会での役割を演じる役者として登場し、「公言することと行動」(profession and deed)⁽²⁶⁾、表向きの顔と本音とがあり、物語の進行の過程でそれが暴露—脱神話化(demystify)されるというのである。ノリス夫人は自己犠牲的な姉と伯母を、マライアとジュリアは作法にかなった若者女性を、トムも長男としての父親代行を、とりわけサー・トーマスは父親の役割を演じながら、その本性が露見するという。

サー・トーマスのファニーへの親切の見せかけは欺瞞的である。例えば、彼女への舞踏会后すぐに休むようにという「アドバイス」は実際には、語り手がいうように「絶対的な権力のアドバイス」(advice of absolute power) (M 280) だったのである。二人を引き離すことによってヘンリーのファニーにたいする執着を促し、「説得しやすい」(persuadable) ところを見せることによって、ファニーにたいする印象をよくするための演出だったのである。ファニーをヘンリーと結婚させようとしてする様々な忠告や説得は自己矛盾と「でたらめ」(double talk) で強制に満ちあふれているさまが指摘される。頑として説得に応じないファニーにたいする先に引用したサー・トーマスの怒りから発せられることばの背景にはフェミニスト(的思想)にたいする保守主義者の反発が反映している。サー・トーマス・パートラムはファニーの態度をフェミニストの「急進的な行動指針」(radical agenda) と「御しがたい情熱」(ungovernable passions) の所為にしているのである。⁽²⁷⁾

Her resistance implies an assumption of self-responsibility that challenges his authority, and he is alarmed. Unlike Austen's other country gentlemen, who typify the mores of their station without much self-reflexivity, Sir Thomas is alert to revolutionary ideology. His violent antipathy to the "independence of spirit" and the determination to "decide" for oneself prevalent in modern females is anchored in much of the postrevolutionary discourse we have already reviewed, where the merits of thinking for oneself were widely debated. Sympathetic young men in Opie's *Adeline Mowbray* and Smith's *Young Philosopher*, for example, get into trouble precisely because they are committed to the principle of thinking, judging, and deciding for themselves, rather than conforming slavishly to the dictates of authority or convention. By contrast, in her *Letters Addressed to a Young Man*, Jane West denounces self-conceited independence in favor of a Burkean "concurrence" to "established forms" that have emerged over time. Counterrevolutionary writers looked upon "independence of spirit" in a woman with even more alarm. In "The Unsex'd Females," the ne plus ultra of the period's antifeminist rhetoric, Richard Polwhele denounced literary ladies in England for their sexual immodesty and republican sentiments, equally unclean violations of natural law. Less grossly, but no less fervently, Letitia Hawkins elaborated the

commonplace equation between the government of the passions and the government of England, when she opposed radical sophisms about “equal rights, the abjectness of submission, the duty of every one to think for themselves,” because they diminished “the respect formerly paid to authority” and encouraged a tendency to regard a “husband as an unauthorized tyrant,” a tendency which could only culminate in promiscuity and adultery. ⁽²⁸⁾

ファニーの自分への「反抗」は彼女が「彼の権威に挑戦して自己責任を負う」ことを意味し、サー・トーマスを動揺させる。ここには、サー・トーマス同様、家父長制社会における「女性」の父親の権威に「自ら考え」、「抵抗する態度」に反対する同時代の作家・評論家の意見が紹介されている。それはバークを中心とする「反革命派作家」(counterrevolutionary writers)・保守主義者の意見を代弁している。就中、ホーキンスは「平等の権利、服従の卑しさ、全ての者が自ら考える義務」に関する「急進的な詭弁」に反対を表明する。それが以前に払われていた権威にたいする敬意を失わせ、夫を権限のない暴君と見なし、乱交と不義密通に至らしめる傾向を助長するという理由からである。ジョンソンはこの意見にたいして反論する。『マンスフィールド・パーク』において起こった「女性的な不謹慎」(female immodesty)に伴う不倫や不義などの諸悪は、保守主義的な作家が考えたこと、つまり女性が平等の権利や服従への抵抗や自ら考えるという権利や自立を主張することとは相容れない原因に起因するのであって、『マンスフィールド・パーク』で唯一手を汚さずに済んだ人物(ファニー)は、むしろ罪を犯さないために自ら考え、社会的・宗教的権威に反抗しなければならなかったのだと主張している。そして「従順で穏やかなファニーに急進的な行動指針をとらせ御しがたい情熱を抱かせたのはサー・トーマスの並はずれた無知覚のせいである」と結論づけている。家長サー・トーマスに対峙し、自らの信念を通そうとするファニーの態度を、ジョンソンは「受け身的な攻撃性」(passive aggression) ⁽²⁹⁾とも呼んでいる。

4.

家父長制社会における女性に課される役割の圧力に堪える以外にファニーには恩人(benefactor)サー・トーマスにたいする感謝・恩義(gratitude)という負担もかかってくる。恩人と恩を受けるものとの関係は主人と奴隷の関係にも通底する。ジョンソンはオースティンが「慈善の不吉な側面とそれが受ける者に課す恩義の負担を探求している」(Austen explores the sinister aspects of benevolence and the burden of gratitude it places on a recipient) ⁽³⁰⁾と述べている。

ジョンソンは『マンスフィールド・パーク』の結末について、いくつかの不满を述べている。最初に挙げるのは、語り手「私」が登場してエドモンドがメアリーを諦めファニーと結婚するに至る経緯を読者の推察に委ねると語り出す大団円の扱いについての不满である。ノリス夫人の追放についても不满を述べる。彼女は悪党(villain)というよりサー・トーマスの代理人(surrogate)ないしは補佐(adjutant)的役割を果たしている面もあり、全ての責任を負わせた形で追放するのは、オースティンの「権威ある人物(この場合はサー・トーマス)を直接的に攻撃することへの不安」(Austen's uneasiness about assailing authority figures too directly) ⁽³¹⁾に根ざしている。ノリス夫人がサー・トーマスの責任も全て背負い込んだというのである。つぎに挙げるのが『マンスフィールド・パーク』のハッピー・エンドがもたらさずは満足を損ねる「道徳的な資質」(the moral stature)についてである。

The doubts we are obliged to form about the moral stature of Mansfield further compromise the satisfaction typically proffered by a happy ending. Throughout the novel, the moral welfare of the great house has been subject to the self-will, the bad judgment, or the mercenary projects of those appointed to govern it, and every time Fanny has had to struggle with uncertainty “as to what she ought to do” (MP 152-53), it has been because such figures urge her on to what she knows she ought not to do. And although Fanny has been independent enough to resist them, she has never been lucid enough to recognize what is problematic about their authority even as she sees them err, even as she is obliged inwardly and outwardly to resist them. After Sir Thomas tries to force her into the arms of the man who disgraces his family, Fanny still sees him as her “rule to apply to,” and stands in “dread of taking a liberty with him” (MP 436). Edmund is yet worse. If it is true, as he proudly declares, that “as the clergy are, or are not what they ought to be, so are the rest of the nation” (MP 93), then woe to England, for Edmund shares his father’s tendency to invest personal desires with the dignity of moral imperatives. Yet to Fanny, Edmund remains “an example of every thing good and great” (MP 37), even after he urges her to settle in with Mrs. Norris, to take part in *Lovers’ Vows*, and to marry Henry Crawford. ⁽³²⁾

と述べている。ファニーはこれまでサー・トーマスの誤った判断や支配的態度に苦しめられ、反抗もしてきたが、依然として彼を行動の規範とし、なれなれしくすることを恐れ、これまでと状況が変わる気配はない。エドモンドは「牧師があるべき姿をしているか否かが国民のあるべき姿に反映する」とうそぶくが、「個人的な願望に道德規範の威厳を付与する傾向を父親と共有している」ので国家の将来は託せない。頼りにならないというのである。意に反するノリス夫人の家に落ち着くこと、『恋人の誓い』上演に参加すること、ヘンリーと結婚することなどを勧めたのも彼である。にもかかわらずファニーは彼を「優れて偉大なものの模範」と仰いでいる。ファニーがポーツマスに帰されたときにあこがれの気持ちで見たマンスフィールド・パーク——陽気で、秩序ある、「みんなの気持ちが配慮される」(every one’s feelings are consulted) 場所——は必ずしも真実の姿ではない。家長サー・トーマスの君臨するマンスフィールド・パークは昔のままである。マンスフィールド・パークとその家長サー・トーマスには、ファニーとエドモンドの結婚を契機に変化が訪れることはなく、旧態依然とした姿を留めることになる、というのがジョンソンの見解である。

したがって、ジョンソンは、ジェイン・オースティンが『マンスフィールド・パーク』において、保守的な家父長制社会とそれがもたらす現実（これをジョンソンは神話と呼んだが）に鋭い目を向け、フェミニスト的視点からその神話性を剥奪 (demystification) し、「見せかけ」(pretence) と「実態」(substance) の矛盾にアイロニーを投げかけて、ファニーに抵抗させるが、彼女が回帰する場所は再び保守的な家父長制社会であることを指摘する。ジョンソンは

The most unsettling irony of *Mansfield Park*, then, is that the failures of conservative ideology fall, not exclusively, but still most heavily, on the only member of the household to believe in and act by it fully to the end. ⁽³³⁾ (115-6)

と述べ、『マンスフィールド・パーク』の解決することのないアイロニーは、「保守的イデオロギーの欠陥」が最後の最後まで信じ行動の規範とすべく、専らというわけではないが、最も重くファニーに

降りかかり続けることだと論じている。

フェミニズム批評は、元来、男性中心の家父長制社会にたいする批判と反抗から生まれたものであり、ジェイン・オースティンのフェミニズム批評も彼女のヒロインたちにフェミニストの姿を重ねて見るという単純な試みから始まったが、ジョンソンのような精緻な分析によってその限界も見えてきているといえるかも知れない。

注

- (1) 相澤 興一、メアリー・ウルストンクラフト著『女性の権利の擁護』の思想、長崎県立女子短期大学 研究紀要 第32号、p. 53.
- (2) Jane Austen, *Northanger Abbey* (1818), ジェイン・オースティンの作品はオックスフォード大学出版局 (Oxford University Press) 出版、R. W. Chapman 編、ジェイン・オースティン全集 (1969) を使用した。以下 *Northanger Abbey* は NA, *Sense and Sensibility* (1811) は S&S, *Pride and Prejudice* (1813) は P&P, *Mansfield Park* (1814) は MP, *Emma* (1816) は E, *Persuasion* (1818) は P と省略する。なお各作品の後の数字はそれぞれの作品のページ数を示す。
- (3) David Monaghan, *Jane Austen in a Social Context*, (The Macmillan Press Ltd., 1981)
- (4) *Ibid.*, pp. 105-121.
- (5) *Ibid.*, pp. 143-158.
- (6) *Ibid.*, p. 107.
- (7) *Ibid.*, p. 110.
- (8) *Ibid.*, p. 145.
- (9) *Ibid.*, p. 148.
- (10) *Ibid.*, pp.155-6.
- (11) *Ibid.*, p. 157.
- (12) Leroy W. Smith, *Jane Austen and the Drama of Woman*, (The Macmillan Press Ltd., 1983)
- (13) Margaret Kirkham, *Jane Austen, Feminism and Fiction*, (The Harvester Press Ltd., 1983), p. 82.
- (14) *Ibid.*, p. 13.
- (15) *Ibid.*, p. 59.
- (16) *Ibid.*, p. 56.
- (17) *Ibid.*, p. 101.
- (18) Claudia L. Johnson, *Women Politics and the Novel*, (The University of Chicago Press, 1988), p. 97.
- (19) *Ibid.*, p. 96.
- (20) *Ditto*.
- (21) Johnson, *Op. cit.*, p. 100.
- (22) Marvin Mudrick, *Jane Austen: Irony as Defense and Discovery*, (Princeton University Press, 1952), p. 178.
- (23) Johnson, *Op. cit.*, p. 96
- (24) *Ibid.*, p. 98.
- (25) *Ibid.*, p. 100.
- (26) *Ditto*.
- (27) *Ibid.*, p. 105.
- (28) *Ibid.*, pp. 104-5
- (29) *Ibid.*, p.114.
- (30) *Ibid.*, p. 107.
- (31) *Ibid.*, p. 115.
- (32) *Ditto*.
- (33) *Op. cit.*, 115-6